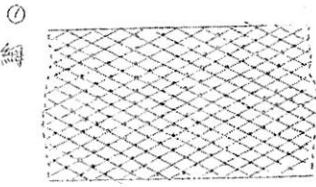
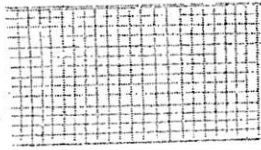


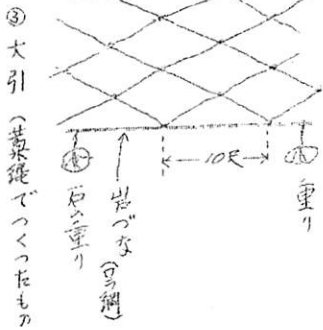
漁網 三種



① 網
普通の網と
かえり又は三種あり
申は一尺余

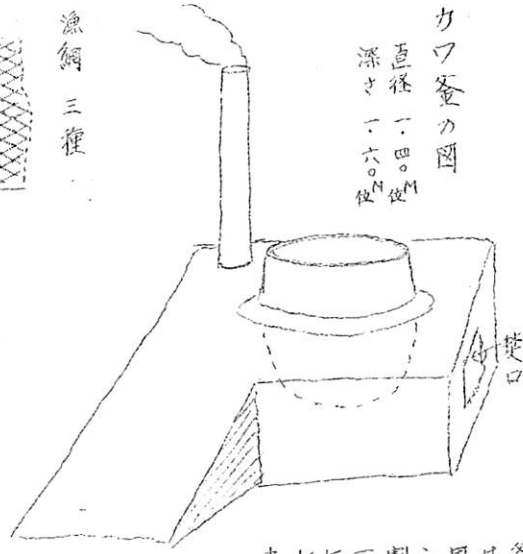


② モシ



③ 大引 (葉巻でつくったもの)
↑ 岩つな (豆網)
↓ 石の重り

樽のウキ



カワ釜の図

直径一・四。M
深さ一六。N。使

焚口

次に、今はナイロン網と変わった為網染はなくなりまし
たが、また綿糸入網入時、夜焚網と漁休入(月夜)毎に
網をといで染め直ものです。次の釜はカワ釜とも云ひ、
カワ釜とも云つて居ますが、わけは知りません。

釜の中に入れる薬品
はカウチーと云ひ、
図形で名はビルド
ンヌをいして居る。
割て使ふ。夜焚網
一回染めると二、三回
に使用す。
水及びカウチーは適
当に決まっています。

(この釜の図には
更に詳しい図説し
た説明が添えてある
が、都合により省い
た。) (編集者)

網針

針筒に入れる網針は古江をさがす極電流しました。



糸のかけ方

針の先Bと押して中の針Aに糸をかけCをまわ
して裏からBと押してAにかけ、又Cにかけて表から
Aに分ける。

では今日口之にて失礼致します。

時節極御自愛の程祈り致します。

十月十三日

青木

(編集者 宛)

(註) 本稿は昨年十月号に間に合はず、十一月では北下の市の
季刊により外れ、そこで手許に保留、その旨青木氏に
伝え、今年九月にようやくきたこと、今年一月青木氏に
急送された。そこで北下の市(大宮八幡の秋の大祭)近き
今日号に載せる次第である。
(今年の上丁の市は九月廿五、廿六、廿七日の三日間の由。)

(村松)

研究

鏡「西南の役」と黒沢

多田光の著表(巻末三七号)を考察する

山本

係

(会費・佐伊市青山小学校校務)

八月六日のNHK大分テレビに、別府駐屯の自衛隊員
が大分市松原山陸軍墓地(西南の役戦死者三二一名)墓
霊が眠っていますの清掃に当たっている場面が、写し出

されていまして。

近くは護国神社には、警察官墓地（西南の役戦死者墓
碑一〇五基）もあります。

八月廿二日午後、佐伯市白坪の陸軍墓地へ西南の役戦
死者軍火一三四基、警察官一四基、合計一四八基）と
訪れました。

一四八基の英霊は、敵愾の碑並に東京警視寮隊
死之碑と共に、夏草の中に静かに眠っています。九二
年前の西南の役と想起して感慨無量でした。

帰宅後、佐伯史談第二七号、多田太郎吉老の「西南の
役と黒沢」を再び読みました。記述は、第一話
から第八話にあたりています。第一話から、順序に従っ
て分析してみました。

第一話「明治十年西南役のこと、祖母（故人、嘉永生
オキ）の話によると、田植おかりで田の草をとつてい
ら、下の方（佐伯方面）から、軍服を着た人が何人も来
るまで、どうしたかとかと恐るおそる見ていたところ、
各戸に立ちよって、門口にはりがみとし、銃撃せよと云
うので驚き、……」

このことについて、佐伯史談会客員柳井雅雄氏は、「西
南の役御上戦史」で次のように述べています。

「明治一〇年七月二日、仁田原（直川村）の官軍は投降
して来た日向敏記士族（宮崎県日南市）を越進は、薩軍
は新たに奇兵隊二四聯隊を編成し、其の六中隊を八戸に
置き、前一日、熊田（宮崎県）に入り、全力を挙げて豊
後方面の回復を図っていると自白した。

此の報を受け大谷干城將軍（熊本鎮台司令長官）は、
重岡において、幕僚（野津大佐、兒玉少佐）と作戦を練
り、新設部隊の進出前に打撃を与えなければと、各地に
有力な斥候を放ち敵状を探った。

然し、重岡、陸地の線を守備中の堅く、容易に攻め出
来そうにないから、北浦甘（宮崎県東臼杵郡）より國境
沿いの新しい宿路を遮断して糧道を打ち、戦力の低下
を見て一気に攻めようとした。七月二日、堅田村（青山
悪沢）との国境石神峠（大永七年、御年礼城主佐伯惟治
が日向落ちの際、通過したという）の奪取を佐伯駐屯
島鎮台野田大尉に命じ、養親四番隊（萩原隊）と協力攻
撃した。

石神峠の占領は成功せず、隣接の烏平山を占領し、三
河内（宮崎県東臼杵郡）に進撃したが、薩軍の迎撃に会
い、山岳重畳の不利な地形の後退、烏平山に据り守備
をかたみ、北浦甘方面より陸地峠一帯の輸送を中絶する
事に成功した。

此の時点に於ける薩軍の食糧不足は、限度に達してい
た。この新設の補給路を失った事は大きな打撃で、敗走
後の餓死死体と、後説する伝説によつて充分理解する
ことができる。

田植おかりと七月一二日との表現が両者一致していま
すし、官軍が黒沢に進駐して未だ理由も解明されません。

第二話、「黒沢奇落は皆、官軍の宿舎になり、本營は桐
野落の東光庵（二旅の先鋒隊は有名、明治二七年四月
二日鶴谷学館教師岡本田独歩が来訪）におき、黒沢の女
衆は皆毎日炊出しに使われ、男衆は弾丸運ぶ、兵糧の運
搬、橋かけなどに協力したと云うこと、……」

広島鎮台野田部隊及び東京警視寮隊に協力した黒沢
部隊の情景が巧みに描かれています。
南華柴田陽実編「豊後西南戦記」に次のようなことが
書かれています。

「当時（明治一〇年七月一日、日前後）谷少将は重岡にお
り、野津大佐、兒玉少佐と共に追撃の策を議し、斥候を

被つて敵状を探らしむ。

然るに重岡、仁田原方面は薩軍の守備堅く容易に攻略し難き状況にあり、黒沢口より及ばずや手薄にて間隙ある模様、依つて之を伐つべく佐伯駐屯の野田大尉をして進撃せしめ、出張参謀部をおき、堀玉少佐之を督激。一二日午前三時、敵と融れ合い、石神峠に出で交戦、發砲四番小隊(萩原隊)の半隊は、敵の壘後に迂回して之を撲撃、馬子山と占拠、三河内に入つたが地勢悪く不利と見て馬子山に後退して守備を堅くした。

鶴谷佐藤蔵太郎先生曰、「陸復史蹟考」で「昔々西南の後、某將軍東光庵の樓に馬をつまいて觀賞せしとは、野田家の虚構に出づるものにして、事實におらず」と述べています。多田老の語ハ話「故後藤友木郎さんから直傳聞いたのです。彼日野津大佐と見えと云つていましむが、ご存尊の野津さんは、こちらに来っていないが、参謀隊長には誰か名を切る方が来ておられた事かと思います。」と語っています。

出張参謀だった堀玉少佐(後の陸軍大将、日露戦争、総参謀長、智将)が、桐原東光庵の名を援護を觀賞した入は無いでしょうか。多田老の見解に軍配が掛かりそうです。

この西南の後には、野津大佐、堀玉少佐、奥少佐、乃木少佐、大迫少佐(時に不本善典少佐は西南の後で前隊旗を薩軍に奪われたと云われています)など、二七年後の日露戦争に第一、二、三、四軍の各司令長官となつた勇将が、黒土峠、赤松峠、陸地峠、石神峠、津島峠、三河内作戦に参加していることは興味深いことです。

このことについては、柳井雅雄氏が「陸地峠攻防戦で孤立した官軍は、重岡に援軍を求めようとしたが、内水、渡山より峠の背後は、寸草もない防備で連絡絶え、止む

を得ず仁田原方面の指揮官奥少佐は自ら重岡に、又、大迫少佐は佐伯に急行して援軍を要請した。これに対し上直見村駐屯広島鎮台の野新中佐、部隊と赤木少隊線に増援する事に諒解を得た。

重岡に在つて、此の状況を知つた各將軍は事々重大さに驚き、指揮命令系統の混乱は、臨機応変の作戦行動に支障ありとし、独断にて爾令(後)方面の最高指揮官たる旨を布告し、其の統帥に出馬した。

名古屋、大阪、本島、熊本各鎮台兵が、豊日園境の戦場に参加しています。当時、全国に六鎮台(残り山台、東京鎮台のみ)ありました。明治政府は徳力を結集して、薩軍征討(征討総督、有栖川宮儀仁親王、征討大軍、陸軍中将山県有朋、海軍中将山本純義、新上陸軍中将黒田清隆)に當つています。熊本鎮台(各將軍)はそれ一翼を折つていました。いかにこの戦争でなつたかがうかがわれます。

第二話、西南復讐時、この頃六つ日間(日)とんど雨が降り続きました。

柳井雅雄氏は次のように書いています。「六月二十四日、中津増田隊(隊長は津田與平藩士増田大孝志松峠(宇目所)を奇襲した。官軍は長く防戦にへといたが、濃霧咫尺を弁せずの悪天候で……」

七月一日より降り出した雨は益々激しく、官軍の決死隊あり、この悪天候に好機逸すべからずと、官軍の決死隊は陸地峠(豊日園境)より、又松の内より天狗嶺(壘下)を迂回、峠の後方に潜行、壘の背面に出た。薩軍は、悪天候にうっかり油断したのか、……」七月一日正午下がり、霧の雨に官軍の隊間は、陸

地連峯にこゝましまして、

兩模様もひつたりです、

第三話、家には奥州兵がとまつていて、言葉(方言)がわかりにくく、

西南役の時にも、明治政府が奥州地方で、よかん下兵

隊と募集して、政院島へ薩摩藩へ征伐して、明治元年の仇を討つてやれと意気して、

薩長聯合軍のため痛い目にあつて、

奥羽越前藩降服、立後郭落城まどがとれです、奥羽地方の多くは旧士族が募兵に志し西南の役に従軍しました。

事実、奥羽兵が憲法に駐比して、

後において、鎮台兵をけりては兵力が充分でないで、

士族の中から巡査を募集しました、

部補として出征しました、

当時、東京に警視庁があつて、大警視がその最高責任者でした、豊後方面の指揮官は、三等大警視萩原若貞でした、

四坪の招魂所の「東京警視救隊戦死之碑」は、これに副連性があつた、

第四、五話には、三河内戦の状況が述べられて、

第六、七話には、中山へ上野田への二つの坂も負傷兵を水に白坪の招魂所について飲んでいます、

佐伯病院では、官軍側七名の戦死者がでました、

結論としては、今更なから、多田太郎吉老の記憶力と、柴田勝安氏、河野典一氏、柳井雅雄氏、真柴步氏の研究に感服するばかりです、

古老にお話と聞き、また、足を運んでの研究調査が、いかに大切であるかと痛感させられました、

同時に、西南役戦地事蹟報告書へ佐伯村、上直見村、藤山村、仁田原村、赤木村、北市尾溝、葛原浦、その外、因尾村、赤木村、江尾村、下直見村、海舟村」と読んで、その戦いか、佐伯市、南海部郡の全地域にまたがった大規模なものであつたことと知ることが出来ます、

(ちりり)

古資料

佐伯藩の領域

「豊後国古城蹟並海陸路程」より摘萃

提供 佐 藤 賢 一

◇毛利市三郎 領分

三代高尚、寛永八年生、寛永十年二月襲封、寛文四年八月三日歿、年三十四才

長川院殿法雲宗誨大居士

(海)

一 在御城下より北三方、保戸嶋の邊迄、海上七里、

此邊之はは、浪断、長さ三町、岩岸深く潮干満かまひなく、潮懸り吉、大風なごに船懸り不成、

浪の口申、西風悪也、此保戸嶋之邊之沖に、高甲と申、

難所有、船懸八拾七間有、高甲より沖へ、瀬底老里、

半有、北之方に、むく嶋と申、保戸嶋より海上式里、此むく嶋迄、市三郎領分、是より細川殿守領分、佐賀領迄五里

(海)

一 鳩浦之邊、保戸嶋分海上式里、此邊の口、長橋町、

此間に鳩有、浪の口は四町、岸深く、潮干満にかまひなく、船懸り吉、城下より海上八里、此より稲葉無登守領分、長目の邊迄、海上三里、